

愚者の科学

列島縦断キャンペーンの旅から

あすなろ社

竹岡準之助



者の科学

断キャンペーンの旅から

岡準之助

愚者の科学 列島縦断キャンペーンの旅から

一九九一年十月二十五日発行

定価——一二〇〇円(本体一二六五円)

著者——竹岡準之助
発行者——

発行所——あすなろ社

〒169 東京都新宿区西早稲田3-29-11 小泉ビル
電話(〇三)五二七三—八六二一
振替東京九—六七四四七

印刷——信毎書籍

製本——大口製本

© Junnosuke Takeoka 1991

愚者の科学 * 目次

出発まで 7

I 甲府—清里—長野—松本—大町 14

福井—岐阜—豊橋—静岡 25

II 苫小牧—旭川—札幌—函館 38

青森—秋田—盛岡—長者原 51

仙台—山形—福島—郡山—いわき—勿来 62

III 四日市—和歌山—京都—奈良—大阪—神戸 74

大津—名古屋—飯田 86

IV 徳島—高松—坂出—丸亀 92

高知—松山—広島 103

広島—松江—米子—鳥取 112

V

岡山―神戸―京都―東京 125

福岡―佐賀―長崎 136

熊本―鹿児島―宮崎―大分 147

大分―下関―北九州―福岡 159

VI

土浦―水戸―宇都宮―桐生―前橋 174

長岡―新潟 186

あとがき 198

装幀／浅田隆夫

愚者の科学

■ 列島縦断キャンペーンの旅から

出発まで

一冊の本を持って旅に出ることになった。読むためではなく、売るためである。

書名、清里。著者、奈良靖夫。発行者、私。発行所、あすなろ社。

奥付風に書くと、そうなる。山梨県も長野寄り、八ヶ岳山麓の清里に入植して、原野を切り拓き、理想をかかげて牧場の建設に打ち込んだ奈良さんが、苦闘のすえ戦い利あらず、牧場を閉じるまでの二十年をふりかえった半生の記録である。

原稿を一読した段階で、私はたしかな手応えを感じとっていた。辛苦を伴う開拓生活を軸に、共進会に出陳した牛が優勝をかちとるなど酪農生活の一部始終が辿られていたが、読み進むうち、これはたんに農業について書かれた著作ではないということに思い至った。希望があり、努力があり、ささやかな栄光があった。出会いや別れがあり、そして挫折や未練があった。これは、いいかえれば、われわれの人生そのものではないか。敗残の道を辿る奈良さん自身の足取りはもとより、揺れ動いた日本の農業、世の移り変

わりを、海拔一一五〇メートルのいわば僻地から冷静に見据えているその眼にも、打たれた。

けれども、出版は水ものといわれる。よい本必ずしも売れるとは限らないのだ。売れなければ、それがそのまま赤字となつてはね返ってくる。脆弱な基盤しか持たない出版社は、その赤字の多寡によつては忽ち足許をすくわれかねない状態に陥る。一冊一冊が勝負であつた。

新刊を出すたびに、私は書店を回つて歩いた。書店の人たちに少しでもその本のことを知ってもらい、一日でも長く店頭に置いてもらえようと、注文をとりながらたのんで歩く。そうしてとつてきた注文も、売れなければ返本となつて戻ってくるから、無駄足を踏む結果に終わらないとも限らないが、じつとしておれなくて出かけていく。その繰り返しであつた。

『清里』を売り出すについても、現在おかれている状況の中でとれそうな方法をあれこれ考えてみた。ひとりでは何ほどの妙案も思ひ浮かばなかつた。これまでとつてきた方法をなぞりながら、その範囲をひろげ、集中して実行に移すしかない。具体的には、新聞社や雑誌社を回れる限り回つて読書欄に取り上げてもらえるようにたのんでみることに、全国のおもだった書店を回れるだけ回つてその力を借りること、この二点である。そして、おこがましくもこれを全国キャンペーンと称することにした。抱懐するところ壮なるものがあつても、それに見合うだけの経費はどこからも捻り出せない。零細出版社の

辛いところである。

今回のキャンペーンには、車に本を積んで出かけることにした。交通の足を車に求めたのは、経費の面から近年値上がりのはげしい鉄道利用より安く上がることが第一、ガソリン代と、場合によっては若干の道路料金だけですむからだ。いま一つの利点は、ドア・ツウ・ドアで書店が回れることだろう。列車を乗り継いで行く場合は、『時刻表』にもとづいて日程を立て、割り振られた時間の中で動かねばならない。予定の列車に乗り遅れまいと息せききって駅にかけつける。その上、階段を駆け上ったり降りたりするのに要する神経と体力の消耗度を考えると、車のほうがまだしもという気がした。それに、夜になって泊まる場所がなくても、その気になりさえすれば、いつだって車の中で泊まることもできるのだ。

また、地方の新聞社を訪ねて、もしその新聞社がいちはやく取り上げてくれたとき、列車利用だと後手に回るおそれが出てくる。なぜなら、一度キャンペーンの旅に出ると、回る地域にもよるが、まず一週間は戻れないとみななければならない。とってきた注文の本を取次経由で書店に送りつけるのはそれからということになるからだ。そんなに早く記事になって掲載される可能性はきわめて少ないといわねばならないが、それでも数少ないチャンスは生かしたい。本を車に積んで出かければ、その場で置いてこれるのである。

たまたま、昨年、十年以上乗り回してもう見るかげもなくなっていた車をやっこの思

いで新車に取り替えていた。サニーの1400GL。走行距離はすでに八千キロをこえ、慣らし運転の期間は過ぎていた。この車なら、どんな道を走ろうと、どんなに長駆しよう、トラブルを起こす気遣いはない。

問題なのは、むしろその車を運転していく当の本人のほうだろう。四十も半ばをすぎ、だんだん踏ん張りがきかなくなってきた。しかし、書店や新聞社を訪ねながら全国を走破するといっても、一気に縦断するわけでも、記録を争うわけでもない。たしかに体力と気力を一定期間持続させなければならないが、『清里』は十分その気力を奮い立たせてくれるだろう。あと十年経ってやれといわれても自信はないが、いまなら何とかやれそうな気がした。計画がふくらんでいく段階で、ゼッケンの着用を思いついたのもあるいは私自身、この全国キャンペーンを一種の稀有な耐久レースと見立ててのことであつたかもしれない。

『清里』という書名をゼッケンに謳い込むのは簡単だった。腹背に一文字ずつ配せばよかった。「こんにちは」したときが『清』で、「さいなら」したときが『里』となる。合わせて一本というわけだ。両面に書名をまともに謳い込むのはさすがに照れ臭く、二字を分断させることによって、さけることのできない気恥ずかしさを紛らわせようとしたのである。書店の人には当然奇異に映るかもしれない。だが、その奇異な眼をこちらに向けてくれるだけでも、ゼッケンを着けていった甲斐があつたというべきだろう。

もうあと何日か本が出来上がるという日、街へ出たついでに、ゼッケン用の小切れ

のほか、一冊のサイン帳とサインペンを求めてきた。

ゼッケンは、二枚の四角い布を平紐でつなげ、それを振り分けにしてかぶればよいと考えた。腹背に垂れ下がった紐を両脇で結んで固定させる。あまり不細工なものになっても困るので、そのように注文をつけて妻に作らせたところ、「よしなさいよ、みつともない」とにべもなかったが、それでも手早くどうにか見られるゼッケンを拵えてくれた。それに油性のインクを何度も塗り重ねて『清』『里』の二文字を書き入れた。キャンペーンのシンボルともいうべき手作りのゼッケンがそうして出来上がったことに、私は他愛もなく満足した。

サイン帳を用意する気になったのは、最初で最後になるかもしれないこんどの全国キャンペーンを、何か形になったもので残しておきたかったことと、キャンペーンで会った人たちのコミュニケーションをより緊密にしたかったからでもあった。初対面の人とはむろん名刺の交換ぐらいはするだろう。しかし、あとで束になった名刺を整理しても、顔すら思い出せない人が少なくない。名刺にいくら趣向が凝らしてあっても、所詮それは一枚の紙切れにすぎず、その人格まで伝えてはくれない。行く先々で記帳してもらっておけば、その筆跡からだけでも、その人の表情や声音、あるいはそのとき交わした話の内容や情況まで想い起こす手立てにはなるだろう。一冊になったものであれば、名刺のように散逸するおそれもなく、私自身のキャンペーンの軌跡を同時にそこにとらえることもできるわけだ。

五月十四日、見本が出来上がってきた。見本を手にして私はひとり会心の笑みをもらった。サイロのあなたに真紅の大きな太陽が沈む写真を手に入れたときから、その効果を信じて疑わなかったが、本の顔ともいえる表紙カバーはほぼ狙い通りの出来ばえを示していたのである。取次に新刊見本を届けるとともに、その日から都心にある新聞社、通信社、雑誌社を訪ねて回った。キャンペーンが始まり、身体もそのように動き出していた。

全国紙から大衆向けの週刊誌に至るまで本を配り終えると、あとは書店と地方の新聞社を残すだけとなった。しかし、これからがいよいよ本番である。いつもだと都内の書店から始めるのだが、今回は、より確実に本の捌ける地域からとりかかることにした。

甲府―清里―長野―松本―大町

車のトランクに本を積み込んで朝八時に出発、調布イチゴICから中央自動車道に入って甲府にむかう。

山梨は、奈良さんにとっていわば地元、友人知己をはじめ、かつての酪農仲間も多いはずだ。まず、その人たちに読んでもらいたかった。そのためには、地元の新聞やテレビで取り上げてもらうことが先決である。『清里』のキャンペーンを甲府からスタートさせたのも、そんな理由からだった。

前もって奈良さんから新聞社やテレビ局の所在を示した甲府の市街地図をもらっていたので、順序よく無駄なく回れた。

どこでもころよく応じてもらえたのは、ありがたかった。山梨日日新聞が文化欄で取り上げると約束してくれたほかは、みな取材して記事にするといってくれた。東京ではなかなかこうはいかない。

全国紙の支局は、大抵二階建てぐらいの局舎の雑然とした一室が編集室になっていた。読者や出先の記者からかかってくる電話の内容は、みな筒抜けだった。先刻、裁判所で投身があったらしい。どの支局もその対応におわれていた。デスクが電話にむかって怒鳴っていた支局もあった。

「三階からなのか六階からなのか、はっきりしろ。……転落というのはだな、君、自殺